

社会臨床の視界

(10)

ソーシャル・ナラティブと社会臨床

- 変わりにくい日常という物語を書き換えることの重要性と
社会の物語構造に着目することの意義について -

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

1. 物語としての社会

前号では児童移民とケア・リーバー（児童養護施設で育った人たち）のことを記した。

イギリスの児童福祉の基本となっている社会的養護について、子どもたちが一貫した人生の筋をつくる、つまり自分の人生の物語を構成していく作業を支援するライフストーリーワークが大切となり、それはトラウマケアともなる臨床的な取り組みであることを紹介した。さらにそれだけではなく、児童移民のような集団的体験は社会の側もそれを包摂した物語をもつ必要があることも強調した。「排除の物語」であったものから、謝罪と和解、史実の探求、修復と回復、理解と共有を基調とした「包摂の物語」に書き換えられるべきだ。これは再物語化＝再著述化とナラティブアプローチでは考える。映画や小説はそれに相応しい媒体となる。研究もまた歴史を冷静に見つめる。

マクロにみれば、児童移民は「帝国のシステム」として作動していた一部なので、それはシステム内部の問題であり、したがって排除の物語という意味づけがあったわけではない。相克はあったにせよ、それを是とした当時の社会の、そして当地の必然

があった。しかし後世からすると別の物語となる。社会的養護の子どもたちを文字通り社会が引き受けるための物語が必要となり、謝罪と和解、再会と修復があるからこそ、個人が自らの歴史を一貫させる支援としてのライフストーリーワークがうまく機能する。そのためにも再著述の力点としては包摂という新しい社会の物語を構築することが大切となる。物語とはひとまとまりとなった意味の体系であり、人々の了解や共感の、行動と規範の源泉となる。ここではそれらをまとめてソーシャル・ナラティブと呼んでおきたい。個人だけではなく社会もまたその有り様を変容させる必要に迫られるという意味での社会臨床的なものの見方である。映画や小説や研究をとおして児童移民についての物語の書き換えとなり、里親を中心とした社会的養護の仕組みがさらに強化され、イギリス児童福祉の厚みをもたらす物語の変更であるようにすることは現在を生きる者の責任であろう。

物語を表現する際に、演劇、映画、小説は格好の手法となる。あいまいで、揺らぎのある、相互作用をとおして変化する関係性という側面は、児童相談所や少年刑務所をはじめとしたいろんな臨床の事例では極めて重要なので、そこからくみ取るべき事柄は大切にしたいと思う。人間行動の不可

解さも含めて逸脱行動や社会病理の理解には広い視野が重要で、趨勢となっている科学的な思考、たとえば、リスク統計的な定量的思考、数理的な根拠づけ、概念的分析的なアプローチにくわえた異なる視点が求められる。だから、あいまいなもの、割り切れないもの、発想を刺激するものを重視するのが社会臨床の視界である。これらは視野を深め、広げ、時にはかすめ、攪乱させてくれる。これを第1号では「家族は小説より奇なり」とも表現し、第4号では「社会の詩的言語としての臨床と表象」と呼んだ。今回の文脈では「ソーシャル・ナラティブ（複数の声から成り立つ〈社会〉の物語）」にとらえ、別の角度から眺めてみることにしたい。

2. ヤン・ヨンヒ監督の映画 - 『ディア・ピョンヤン』から『かぞくのくに』へ

生老病死、貧病争苦があるところには個人の物語とともに家族の物語があり、それは私憤や受苦や被害の体験をもとにする。さらに、ある程度の広がりや関心をもとにしてその物語は、公憤、共感、連帯そして支援などの公共化する行動や作用を媒介として、社会の物語へと変容していく。支配的な物語としてあったものがそうではなく、時には都合のよいように、時にはよりよいものへと、また時には新しい価値の創出のために、随時、書き換えられていく。何らかの社会的変化は物語の書き換えとしてすすむといってもよい。制度やシステムの変更につながると公的な書き換えとして国家の物語も登場する。

以前にも述べたことだが、ナラティブセラピーやナラティブアプローチという言い方は、支配的な物語の書き換えということ

に関心をもつマイケル・ホワイトらの流れをくむ言い方である。セラピーとしての臨床的な対話を組織する際に、支援する者とされる者ではなく、ソーシャル・ナラティブとして再構成するための共同作業者のような立ち位置が大切だと学んだ。マイケルはベトナム帰還兵へのセラピーや暴力加害への臨床を例にしてその立ち位置、つまりポジショニングについて語っていたことを紹介した。児童移民の事例も同じであり、語る者のポジショニング（この場合は、児童移民問題をネグレクトしないための権利擁護と社会的養護の視点）とそれをソーシャル・ナラティブとして再物語化することの大切さを思う。

他にもこれらと同型の主題は社会のなかに遍在している。アート系「京都シネマ」の代表をされている神谷雅子さんと一緒に「シネマで学ぶ社会と人間の現在」というテーマで数本の映画と対談をセットした企画を組んでいる。立命館大学の人間科学研究所が実施している（これらの言葉で検索してもらおうと経過がわかるが、現在は「シリーズ 13」となっている）。シネマ企画はこうしたソーシャル・ナラティブの視点から練り上げている。2009年1月は「家族の現在」と題したシリーズを組んだ。そのひとつとして映画『ディア・ピョンヤン』（2006年）を上映し、監督であるヤン・ヨンヒさんを招き、作品をめぐるあれこれについて神谷さんが聞き役となり対談をお願いしたことがある。

『ディア・ピョンヤン』は北朝鮮を祖国と仰ぐ父と娘のヤン・ヨンヒさんの関係に焦点をあてている。第2作目の『愛しきソナ』（2009年）は北朝鮮に住む姪の成長を描いたものであるが私はまだ観ていない。『かぞくのくに』（2012年）は北朝鮮に渡っ

た三人の兄との関係に焦点をあてた家族の物語である。これは創作であるが、実話は『兄：かぞくのくに』（小学館、2012年）として出版されている。この書物は映画の背景を赤裸々に記したドキュメントである。「私には三人の兄がいる。兄は北朝鮮にいる。『帰国事業』で北朝鮮に渡っていった兄と私と『かぞく』の真実の物語」と書き始められている。

全部、自らの家族の日常を映し出した作品群である。徹底した家族の物語なのだが、その日常には現代日本の家族からすれば非日常とでもいうしかない現実が組み込まれている。朝鮮半島をめぐる現代史そのものが直に表出されているからである。ヨンヒさんの家族は朝鮮半島をめぐる世界の渦に巻き込まれ、錯綜する。父は朝鮮総連の幹部、1959年にはじまり、1960年代にピーク迎え、1984年まで続いたとされるいわゆる「帰国事業」があり、宣伝されたような「地上の楽園」でないとなりに分りかけた段階で父は中学生だった三人の兄を北朝鮮に送り出したという。本来の出身地ではない「北」に93340人が「帰国」した。彼女の兄たちは1971年から1972年に「帰国」した。幾度かその兄たちと会うために妹がピョンヤンにわたる。長男は躁鬱病に罹っていた。その後、父もまた病に伏した。母は実に健気に兄たちに物資の仕送りをつづけている。こうした家族の様子がこれらの作品に描かれている。兄が病気の治療のために三ヶ月だけ一時帰国を許された。しかし終始、監視がついている。家族は自由に話しもできない。検査の結果、手術が必要で、3ヶ月では短いと医師が告げる。兄は寡黙であり多くを語らない。その静かさにかの地の困難が透けてみえる。そんな具合の家族のやりとりが映画には描写され

ている。

3. 「帰国事業」と帰国意思 - 物語の創造

ヨンヒさんは入口と出口の「あいだ」に埋め込まれたテーマを観て欲しいという。在日、親子、恋人関係、介護、思い出、仕送りなどのいろんな「あいだ」がそこにある。はじめに家族ありきの映画である。でも後景に国家の問題がうつり、出口は狭い。『ディア・ピョンヤン』で主役だった父はすでに亡くなり、その墓は北にある。長兄もまた先立ち、その墓もピョンヤンにあるという。「悩んだんです。故郷は済州島ですから。でもピョンヤンにいる次男、三男や孫が墓参りできるようにと。去年、大阪に住む母が遺骨を持って行きました。離散家族ですね。普通に家族と会うとか墓参りするとかって、こんなに難しいのかと。今は行き来さえできれば国は二つでいい、統一しなくていいと思います。北極や南極の方が近くに感じます。隣の国なのにね。」（「家族と国のはざままで・撮る・映画監督ヤン・ヨンヒさん」（『朝日新聞』2012年8月15日、朝刊）と語る。

「帰国事業」は韓国からみると「北送事業」とされる。そしてイギリスの児童移民でも非営利団体や教会が活躍していたが、ここでは国際赤十字社が関与していた。北朝鮮と日本には国交がないからである。また日本国内では北と南を代表する民間団体（在日本朝鮮人総联合会と在日本大韓国民団）が活躍している。くわえて当時の在日朝鮮人問題の解決をも日本政府は意図していたという。さらにアメリカ政府の野望も重なる。これが入り交じり歴史における利害の錯綜と一致も重なり、「地上の楽園へ帰ろう」という物語が創られた。どうして

9万人もの人々が、文字通りの「エクソダス」(集団的移動や脱出のこと)として自らの出身地ではない「北へと帰国する」ことを希望したのかは必要な情報が公開されていない面もあり、今後も検証がすすめられるべき課題となっている。

たとえば、テッサ・モーリス・スズキさん(オーストラリア国立大学教授)の『北朝鮮へのエクソダス - 「帰国事業」の影をたどる』(原著 2007年 朝日文庫 2011年)がある。マクロな歴史記述を元にしていて個人や家族の個別性も描かれた物語的記述となっている。姜尚中さんがその解説文で「歴史の詩学」としてこの書物の意義を評している。歴史の研究という枠を越えた、ここでいうソーシャル・ナラティブに近い表現で、ひとりひとりの顔と家族の事情と歴史の必然と偶然の錯綜した様子が描かれているからである。

菊池嘉晃さんの『北朝鮮帰国事業 - 「壮大な拉致」か「追放」か - 』(中公新書、2009年)にも教えられることが多かった。「大量帰国を生み出したのは、彼らの帰国意思形成をめぐるプッシュ・プル要因にあった」という。「就職支援や差別解消の啓発など定住・共生への責任ある取り組みはほとんどなく、貧困、差別、不安定な法的地位など日本でのマイナス(プッシュ)要因が帰国者らの背を押したのは事実だろう」(232頁)と指摘し、日本社会の側、つまり「こちら側」の影を見過ごせないという。もちろんプル要因もある。「地上の楽園」という物語をつくりだした社会主義国家と社会運動の側(これは民族と革命の物語)である。両者の相乗効果にくわえ、さらにその背景となっていた東アジアをめぐる世界政治の状況が重なる。文字通りの重層的な物語である。

「帰国事業」は強制移住ではなく自発的な意思を尊重するかたちをとっていた。物語作用として社会的に形成された「帰国意思」があり、それを前提に個々の家族の「決断」が行われ、物語が動き出す。ひとつひとつの家族の物語はみな違いますが社会的に構成された物語という大きな方向づけがそこにはある。この「帰国事業」の渦に巻き込まれた家族と個人も児童移民問題と同じようなソーシャル・ナラティブというアプローチがよく似合う主題となっている。

4. ソーシャル・ドキュメンタリーというアプローチ

ソーシャル・ナラティブというアプローチに近いものとして、映像の領域ではソーシャル・ドキュメンタリーといういい方がある。その集大成のひとつに『ソーシャル・ドキュメンタリー - 現代日本を記録する映像たち』(萩野亮・編集部編、フィルムアート社、2012年)という書物がある。この書物の「まえがき」ではソーシャル・ドキュメントはいわゆる「社会派ドキュメント」のことではないと強調されている。従来の社会派に色濃くある啓蒙や反体制の色調とは異なるのだという。では一体何であるのか。「<個>の視点を元にする表現、家族や自身の記録にある社会的な広がりをもつもの、より軽快に、より等身大の空間感覚から、社会のあり方が問題提起されている一群の作品を指した総称だ(4頁)とされる。

このアプローチはここで述べているソーシャル・ナラティブに近い。媒体が映像であるという違いくらいだ。すべての事柄がそこに係留される、そこに参照枠がある、そこに回帰し、そこから生成する、意味の源や磁場となる日常性が私的体験も含めて

表現されていく。日常そのものが懐胎する、清濁併せ持って動いている、国家と社会と世界の「ねじれ」を生き抜かざるをえない現実をとらえたいと思うソーシャル・ナラティブはこのアプローチに近い。私憤、被害、受苦、混乱、錯綜などの体験や出来事は、科学的な学問研究も含みこんでナラティブ化され、ドキュメント化されることで、共苦、公憤、対話、理解、恢復などの社会の物語へと編みあげられていく。その過程はダイナミックである。割り切れない現実が多いのだが、社会の物語として流通することで制度やシステムの変更につながることもある。その記述と表現のもつインパクトはソーシャル・ナラティブとソーシャル・ドキュメンタリーという手法をとおしてひとつの可能性を得ると私は思っている。

かつて「個人的なことは政治的なことだ」とフェミニズムは語った。しかし、現代からすると、政治といえどことなく無骨で無粋ないいようである。あちら側とこちら側、つまり敵と味方に区分けするような二分法がちらつき、「女性対男性」を彷彿させるのであまり用いたくない。私としては、「こちら側の問題性」をも射程に入れて劈開したい。どちらかといえば「メビウスの輪」のようにねじれてつながり、プーメランのようにこちらにも帰ってくる、そんな関係性を射程に入れたいと思う。なぜなら、自らも構成員としてそのシステムを成していることを考えると、そのような関係性を視野にいれ、その言明をより複雑にして、個人的なことと政治的なこととのつながり方の問題として、単なる二分法的なものだけではない「錯綜」をおいておきたいと思うからである。

ヨンヒさんの私的な家族のかかわりを描く入口と出口の「あいだ」には実に多様な

もの、たとえば社会的で公共的で政治的な事項が召喚されてくる、そんな家族の日常なのである。観る者によっては「非日常的現実」と映るが、「拉致家族問題」とはまた異なる位相で「北朝鮮との関係を生きる家族」がそこに描かれている。国家間関係や戦後世界政治の大きな物語としての朝鮮半島をめぐる物語ではなく、家族の物語のなかから立ち上がるこの社会のもつ「きしみ」や「ねじれ」の物語である。そして何よりもそれらをひきうけて生きている家族があり、個人がいる。まずはそうした現実をそのものとして受け取ることが大切だと思うので、ソーシャル・ドキュメンタリーといういい方が効果を持つのだろうし、ソーシャル・ナラティブを聴いて共感するのだろう。

しかしその前に、そのものとして語ることそれ自体のリスクがあるテーマ群をこの手法は選び取る。現に家族の喜怒哀楽を語っただけなのに彼女は北朝鮮への入国を拒否されている。物語化困難な現実が開示されていく。それは私の隣にある質量感をもった日常性である。「帰国事業」や児童移民のこのあとに家族問題を考えると、私の生きる家族との異同とともに家族問題の振幅を考えることを余儀なくされる。そうするとそれに感応し、応答し、近似の現実を理解し、感受する家族支援者や家族問題の研究者であることが要請される、あるいは少なくとも、家族問題のもつ社会性や公共性や個別性を視野に入れつつ、私にできる家族問題の解決への実践と倫理が私的にも公的にも問われることとなる。

この点は、先のマイケルのポジショニング論にならって言えば、選択的夫婦別氏制度や男性問題へのこだわり、そして「家族中心社会・日本」のもつ負の側面を理解し

た上で家族療法論や家族システム論、そして家族問題解決にかかわる実践倫理的な方法論がいかに大切であるかといつも考えている私の背後仮説のように存在している大事なポイントである。

5. 日常性を見据え、それを表現すること

この「帰国事業」という物語もまだまだ解明されるべきであり、現に、1984年まで続いたとされる「帰国者」は家族の現在を「北」でいまも生きている。「帰国事業」の全体像となるとその物語は垣間見えるだけである。また、行き来できるだけでいいとはならない「拉致家族」や「脱北者」もいて、物語はさらに錯綜し、重層的となる。「北と南」という現在を肯定し、そのなかで暮らす家族の安寧が保たれる、安否の情報やりとりだけでもできるということそれ自体、とてつもないことだといえる現実は無視できない。「統一という物語」でなくともいいというヨンヒさんの思いは切実に届く。

さらに他の国々のことであるが、分断された民族や国家の問題が変容した後にもなお残るのは、そのなかを生きてきたひとりひとりの人生の物語の重さについてである。今回は詳しくは紹介できないが、具体的には国家の物語が急速に変化した社会での人々の再物語化とトラウマ的な体験の乗り越えのことである。たとえば、『過去と闘う国々 - 共産主義のトラウマをどう生きるか』(ティナ・ローゼンバーグ、新曜社、原著1995年 翻訳1999年)では、チェコスロバキア、ポーランド、ドイツの事例が具体的に書かれていて、それはそれで大変な経過をたどることが詳述されている。これは「人間が過去を書き直して現在に合わせら

れる能力 - とくに恥ずべき過去と共謀した自らの個人体験を書き直せる能力」(頁)に焦点をあてている。正統性が急速に変化する国家の物語構造の変化に遭遇し、社会、そして個人や家族はどう対応するのか、それがトラウマ的体験のようにしてあることについて知ることの重大性がわかる。革命や変革それ自体への関心は高まるが、その後の社会への関心をも持続させていきたいものだ。

体制変革という「革命の物語」に比べると、「喪失からの回復」の物語はより時間のかかるものである。社会臨床は「革命の物語」ではなく、その予後も含めて社会の回復を視野に入れたいと思うし、一方的に変わるべき守旧的なものと、それを変える者がいるのではないと仮定する。「こちら側」でそれを支えるようにしている頑固な日常があり、変革を唱えるものもそこに巻き込まれている日常の重さがある。

そのよい例を扱った映画がある。『グッバイ、レーニン!』(2002年、ドイツ)である。ベルリンの壁が崩壊する前の東ドイツの首都ベルリンに暮らす息子と母の物語である。母の人生は社会主義の暮らしにどっぷりついていた。しかし時代は変化し、ベルリンの壁崩壊間近となった。息子はその反体制運動に関わっている。デモに参加していた息子をみて母は心臓発作を起こす。昏睡していた間にととう壁は崩壊し東西が統一された。しかしその弱った心臓はこれ以上のショックに耐えられないだろうと医師はいう。そこで息子は一計を講じた。なお東ドイツはそのままであり、母の信奉する社会主義体制は以前と変わらずに続いているという壮大なお芝居を打つことにしたのだ。ニュースを捏造してまで西側化する社会を隠す。あたり前のようにしてあっ

た日常の変化が人々の意識や態度にまで腑に落ちるにはより時間がかかり、負荷ともなることを描いている。だまし続けることの騒動がコミカルに描かれているが、息子が自らの信念を無理に母に押しつけようとせず、むしろ社会主義の元で長く暮らしてきた母の思いと生活に配慮しようとした心配りに感銘を受けた。国家の物語、社会の物語とは異なりをみせる個人と家族の物語である。だから、この息子のようなケアのところが要るのだと思う。確かに共産主義という過去は変化していくが、そのもとで生きてきたという重みや歴史や生活を無視できない。母は個人として、家族としてそこを生きたのだから。日常としてその時代と社会を生きている人たちを一刀両断には否定できないのだと思う。「拉致」や「脱北」や「入国禁止」という壮絶な体験も含まれながらそこには「帰国事業」とおして「北の今」を生きる人たちがいて、レーニンは確かに母を含めて東の人々を生かし続けた重みもあり、また、現になお社会主義社会で生活を送る人々もいて、その功罪と清濁の全部をあわせた社会的現実、そして何よりも西の国々にも課題が山積していることや南の問題もたくさんあることをとらえるためにも、ソーシャル・ナラティブとソーシャル・ドキュメンタリーというアプローチは大切にしたいと思う。

6. 村上春樹さんの発想 - あちら側とこちら側、「合わせ鏡」に映るもの -

児童移民のことを遠い国の、過去の話としてではなくケア・リーバーの問題として再定義してみるとまた異なった把握ができると指摘した。合わせ鏡に写る「こちら側」を照射するものとしてそうした諸課題を置

いてみるとよいのではないかという意味だ。いわば「メビウスの輪」のように捻れてつながる、あるいは「むこう側とこちら側」を架橋する、そして被害と加害の「あいだ」や影として社会病理をみることなどが社会臨床の関心であるとこれまで書いてきた。そうした見地をさらにソーシャル・ナラティブとして意識化していきたいと思っている。

こうしたことに敏感な作家のひとりには村上春樹さんである。地下鉄サリン事件の被害者へのインタビューを試みた動機はこの視点だったと記している。それはオウム真理教とは何であったのかという問いであるが、社会病理学者もまた共有すべきものである。

地下鉄サリン事件と同じ 1995 年の阪神淡路大震災がその後、ボランティアや NPO という新しい物語をもたらしたように、物語構造としてみると、オウム真理教幹部による地下鉄サリン事件からいかなることを考えるべきなのかと問い、被害者へのインタビューを試みた。それを編集した分厚い書物が『アンダーグラウンド』(1997 年 講談社文庫 1999 年)である。そのあとがきは「目じるしのない悪夢 - 私たちはどこに向かおうとしているのだろうか?」と題されている。被害者問題とは端的に言えば二次被害のことである。サリン事件の被害者でその後体調が思うように回復せず仕事を辞めざるを得ない人がいた。「二重の暴力性」と村上さんはいう。それは「むこう側」の課題ではなく、「こちら側」の私たちの課題であるという。被害者インタビューをとおして「むこう側とこちら側」が根っこでつながっていることを明らかにしたいという。だから「アンダーグラウンド」なのだ。もちろん地下鉄での事件だったからと

いう意味もあるが。

さらに物語としてみると、麻原彰晃による安物の救済の物語を阻止できず、現代日本社会における「物語の脆弱さ」を示したものとしてオウム真理教問題があると村上さんは続ける。物語の創造にかかわる作家の責任を自覚した言い方だと思う。あちら側や加害者や異常者たちが一方的にいないのではない。たちうちできない、阻止できなかった物語の欠如をこそ教訓にすべきだと彼はいう。そして、物語のための意味づけを他者に委譲してないだろうかと思う。

この村上さんの問いと類似の問いは社会病理をめぐる諸問題には枚挙に暇がないほどである。たとえば「戸塚ヨットスクール問題」である。ここはスパルタ式に問題行動を直すという施設である。寮生は家族に連れられて常に一定数確保されていたということは何を意味するのだろうか。これも「物語の委譲」である。必要悪なのか、最終的な解決を託したのか、他に選択肢はなかったのか。

『平成ジレンマ』(2010年、齋藤潤一監督)という作品がある。スクールでのしごきが原因で入寮生が亡くなった事件で訴えられ、4年間の刑期を終えた戸塚ヨットスクール校長があたりまえのようにして学校を再開する様子を描いたソーシャル・ドキュメンタリーである。彼を求める人々とともに体罰を必要とするという彼の主張が響く。しかし最後の場面はスクールに入ってくるのが長引いたひきこもりの40代の男性であることから問題のフェーズが変化したことがわかる。やんちゃな非行少年はもう来ない。しかしそれでもスクールに入りたいという人が家族と共に訪れる。行き場のない人たちを誰が、どこが引き受けてい

るのか、と映画は問うているようだ。別の話題ではあるが刑務所も福祉化していると山本譲司さんは『累犯障害者』(2006年新潮文庫2009年)で書き、高齢者や知的障害者たちの排除の物語を描いた。社会的な包摂や統合の物語とそれに支えられたシステムと制度の未整備、家族が最後のよりどころになっている家庭内暴力への無策、虐待が発生するたびに騒ぎはするが社会的養護への関心が向かわない冷淡さなど、「こちら側」の「物語の委譲」の構図、この場合は社会的なネグレクトの様相がみえてくる。

村上さんはこうして合わせ鏡に映り、事件をとおして透視される「こちら側」の論理とシステムこそを問うべきだという。「『あちら側』が突き出てきた謎を解明するための鍵は(あるいは鍵の一部は)ひょっとして『こちら側』のエリアの地面の下に隠されているのではあるまいか」(740頁)という。その『こちら側』とは『一般市民の論理とシステム』であり、『あちら側』とは、『オウム真理教の論理とシステム』であり、両者は一種の合わせ鏡的な像を共有していたのではないか。(744頁)それは「自分自身の内なる影の部分(アンダーグラウンド)ではないか。・・そこには我々の自我と、それが作り出す『物語』が関わっている」(745頁)と考えている。「もしあなたが自我を失えば、そこであなたは自分という一貫した物語をも喪失してしまう。しかし人は、物語なしに長く生きていくことはできない。物語というものは、あなたがあなたを取り囲み限定する論理的制度(あるいは制度的論理)を超越し、他者と共時体験をおこなうために重要な秘密の鍵であり、安全弁なのだから」(750頁)。

7. こちら側を把握する

そのためにまずはメディア・リテラシーである。マスメディアは「地下鉄サリン事件とは要するに、正義と悪、正気と狂気、健全と奇形の、明白な対立」(736頁)を描いた。連載第2号では「思考のレッスン」と記し、この枠づけからとりあえず自由になる素材をたくさん紹介した。それほど多様に、社会病理にはこの種の「悪のドラマ化」が常套的である。「マスメディアの基本姿勢は<被害者=無垢なるもの=正義>という『こちら側』と、<加害者=汚されたもの=悪>という『あちら側』を対立させることだった。・・このような相互流通性を欠いたモーメントの行き着く先は、往々にして、煮詰められパターン化された論理であり、淀みがもたらす無感覚である」(740頁)という。

しかしそれに対して「こちら側の私たちはいったいどんな有効な物語を持ち出すことができるだろう？麻原の荒唐無稽な物語を放逐できるだけのまっとうな力を持つ物語を、サブカルチャーの領域であれ、メインカルチャーの領域であれ、私たちは果たして手に入れているだろうか？」(753頁)。「あなたは誰か(何か)に対して自我の一定部分を差し出し、その代価としての『物語』を受け取ってはいないだろうか？私たちは何らかの制度=システムに対して、人格の一部を預けてしまっていないだろうか？もしそうだとしたら、その制度はいつかあなたに向かって何らかの『狂気』を要求しないだろうか？・・あなたが今持っている物語は、本当にあなたの夢なのだろうか？それはいつかとんでもない悪夢に転換していくかもしれない誰か別の人間の夢ではないのか？」(753-754頁)と問っている。「それらはともに私たちの内部から - 文字

どおり足元の下暗黒 - 地下(アンダーグラウンド)から - 「悪夢」というかたちをとってどっと吹き出し、同時にまた、私たちの社会システムが内奥に包含していた矛盾と弱点とをおそろしいほど明確に浮き彫りにした」(767頁)。

そしてその後も9.11の米国でのテロがあり、昨年には東日本大震災があり、フクシマがあり、もっと身近には滋賀県大津市でのいじめ自殺があり、各地での子ども虐待死亡事件や家庭内暴力事件がある。それらは同じくシステムの綻びを顕わにする。私たちは、日々、その同じシステムを生きている。いじめ、自殺、家庭内暴力、不登校やひきこもり、薬物依存など、それらはすべて地続きにこちらの世界とつながっている。これはしつけであるとして虐待があり、夫婦喧嘩と何が違うのかとDV加害者はいう。これは遊びやふざけの一環だったとっていいじめの暴力性が軽くなっていく。叱咤激励にハラスメントは宿る。相手の尊厳に傷をつけ、罵ることをモラルハラスメントは捕捉した。行きたくない/行けない学校の現実是不問に付されて不登校が語られる。生き辛さや言葉にならない鬱積と薬物依存は近い。言葉にならない身体の反乱が暴力をひきおこす。こうして日常性に病理は宿る。こちら側もその日常という現実を生きている。フクシマはさらに多くのことを問いかける。原子力を夢見てきた長い戦後の歴史と電力の一定部分をそれに頼って生きている現実があり、それを支えた科学技術もあり、日常性から問い直すべき格好のテーマとなる(たとえば、吉見俊哉『夢の原子力: Atoms for Dream』ちくま新書、2012年など)。どこもそうだろうが私の出身高校は戦後になって校歌

を変えた。「原子の時に生を受け、ゆくてけわしき道をすすむ」というくだりがある。広島や長崎のことを踏まえた歌詞であると習った。もちろんそこには原子力の平和的利用という共同の夢見る物語も含まれていた。チェルノブイリやスリーマイル島やフクシマは想定されてはいなかった。こうした類いの夢物語は他にもあるのだろう。

ジェンダーの意識もまた同じ。虐待や暴力を含んだ家族に接することが多い仕事をしていると、同じように、男性性や父性のはき違えを無意識に生きている加害者が轍（わだち）にはまり、愛すべき家庭内の弱者を苦しめている様子と重なる。この場合は安物の「男らしさの物語」にかけがえのない家族を譲り渡してしまった男性や父親や息子の行き詰まりがみえてくる。ナラティブセラピーとしてはその安物の、しかし支配的に、頑固にも流通している、変わりにくい日常的な行動規範ともなっている「男らしさの物語」の書き換えをおこなうこととなる。

こうして社会病理の数多くの事例には、冷淡な傍観者の姿、システムへの過剰な期待、リスク社会の喧伝と扇情、悪のドラマ化への加担、安物の物語への依存など「こちら側」の影が映る。それらはみな「物語の委譲」である。そうではなくてできることをする、日常からの思考、二分法への疑い、あいだへの関心などからみえてくることは多い。

8．物語を書き換えることと知のかたち

社会の物語の再構成を行う際に「社会と臨床」という大きなフレームが貢献する。そこから生成する「臨床の知・実践の知」

についての体系化をしたいと考えている。このマガジンを連載している方々のなかには、同僚の教員たちとチームティーチングで教えた大学院の修了生たちがいる。それぞれ物語を書き換えようとして実践してきた経験をもち、そのことをバネにいまでも努力をしている方々である。

テーマは多岐に渡る。不妊治療であり、スポーツ事故であり、不登校児の認定フリースクールであり、学びの場づくりであり、男性問題という新しいカウンセリング領域の開発であり、精神科デイケアでの回復をめぐるやりとりである。緩慢なようだがしかし確実に動いていく日常が捉えられている。社会の物語を書き換える営みとして、こうした方々の、当事者研究風の描写によって、告発や非難だけではない、しかし単に科学的なだけでもない、ソーシャル・ナラティブとでもいえる社会臨床の記述をとおして可視化されるものの集積は貴重だと思う。こうした積み重ねの結果、制度に風穴があくこともある。認定フリースクール、修復的対話と和解、不妊カウンセリングの開発、男性問題という新領域への挑戦などはその典型だろう。そんな知的なインパクトを大切にしたい。

日常を生きるという意味では実に身近な話題ばかりである。とはいえ、そうしたことを記述するための知の制度は固有にあった方がよいと思っている。臨床の知は個別性を物語として取り出すのに有益だ。これらは合流して「知の創造工房」のようになるといいなと考えている。そのために、制度疲労を起こしている「大学院」という制度を、社会人の実践や知恵が単に当該領域の専門知やその作法にならって表現されるのではなく、ソーシャル・ナラティブという知に変換できるように機能させられれば

と願っている。単に「大学院」が社会人を受け入れるというだけでは無益だろう。新しい知のかたちの創造と流通のためにこうしたデジタルマガジンは力を発揮する。『ドキュメンタリーの修辞学』（佐藤真、みすず書房、2006年）がいう「素材先行主義」（当事者としての特異な体験や出自を過剰に扱うこと）の相対化や社会化にも貢献するので、共通言語として流通しやすいある形式のもとに臨床や支援の実践言説を整形することは大切だと思う。しかしそれが単に既存の学術的なものへと回収されていくだけでは意味が薄れる。新しい知のカタチが求められているのだと思う。

他にも知のかたちとしてこのソーシャル・ナラティブに近い手法にノンフィクションというアプローチがある。すぐれた作品が多い（石井光太編『ノンフィクション新世紀』河出書房新社、2012年が参考になった）。別途、検討してみたいが、ノンフィクションは書き手の意思が前景化する、つまり執筆の意図がよくでた表現方式となる。これは、ソーシャル・ナラティブとの関連では「編集」という作業の位置づけとの関わりで是非とも吟味しておきたい論点である。さらにそれぞれの学問分野における質的調査や事例研究やフィールドワークなどもあり、ソーシャル・ナラティブとの比較で考えていきたいと思う。

9. さいごに

映像によるソーシャル・ドキュメンタリーであれ、物語によるソーシャル・ナラティブであれ、受苦と受難、私憤と不幸、被害と苦痛、混乱と閉塞などの出来事と体験を社会の物語として変容させていく過程で、それらは、公憤と共苦、支援と連帯、回復

と理解などを基調とした物語構造が産み出されていく。臨床や支援の領域では、当事者と研究者の二分法や質的研究と量的研究の二分法が散見されることもあり（もちろん対立的という意味でなくどんな共同関係ができるのかを想定しての意味であるが）、ソーシャル・ドキュメンタリーやソーシャル・ナラティブはその乗り越えも意識している（量的研究の質にかかわるメタ的研究や質的研究の客観化の手法開発も進んでいるが）、当事者であれ（前述した素材先行主義とも重なる）、研究者であれ、臨床家であれ、表現者としての工夫が要ると思うからだ。ここではそれをソーシャル・ナラティブやソーシャル・ドキュメンタリーという視点で紹介してみた。臨床と支援の現実をよりよく表現し、物語の書き換えに向かう知のかたちとしてさらに追求していきたい方法論である。社会臨床の視界に入ったものを伝達する手法を精緻にしていきたいと思う。

追記

入手しやすいこの連載、全編とおして丁寧に読んでくれている方がおり、8月初めの暑い日、東京からわざわざ京都まで訪ねてこられた。夏休みで学生が少なく閑散とした大学のブック&カフェ風のオープンスペースで長い時間かけて連載で扱っている事項のあれこれについて、行間を埋めるような内容の話をした。私よりはお若いその方は毎号の内容について印象に残る言葉を書き出していたのでそれを見せていただいた。ぎっしりとしたメモの束だった。もちろんどうしてそんな具合に関心をもってきているのかについて私もお聞きしながらだったので対話のような時間となった。文

脈の理解をしてきているその方との会話は弾み、行間といっても私があまり意識していないところまで突っ込んでくれたので私としても発見があった。その時はそれでも時間が足りずに、話の最後の方になってナラティブや社会詩学とは何かの話になった。ここで記したことをいおうと思ったのだが時間切れとなった。彼女の質問に応えるような思いで書いた次第である。

こうして連載が10号分もたまると、講演や取材を依頼してくる方、大学院で勉強したいという方、学部や大学院のゼミの学生たち、臨床の現場で出会う専門家たち、そして研究者仲間にもこの連載の紹介をすることがある。少々ハードに、かつボリュームをもたせて書いているので、「アカデミック・エッセイ」と紹介することになっている。第1号に書いたように元々は備忘録として書いているので私の頭の整理のようではあるが、こうして読んでくれている方もいて、また場合によっては読んでくださいとお勧めすることもあり、社会臨床の論としては一貫させようと心がけている。とりわけこうしたオフ会のような出会いがあると、どんなものであれ、やはりものを書いていることの責任を感じる。彼女は今回もまた丁寧なメモをとってくれているかと思いつつ思考の連鎖に終わりは来ない。